

# 2021年度 第3四半期決算説明

東洋紡株式会社  
取締役 兼 常務執行役員  
大槻 弘志

大槻でございます。

本日は、決算説明会にご参加いただきまして、どうもありがとうございます。また、日頃は当社の会社運営、いろいろとご支援、ご助言いただきましてありがとうございます。この場をお借りしまして、御礼を申し上げます。

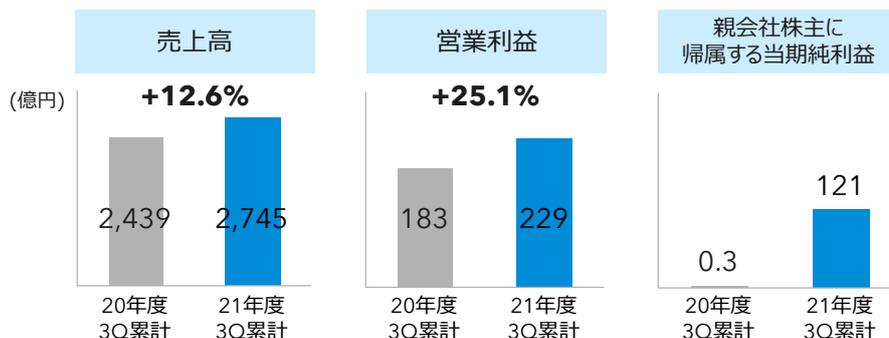
それでは、第3四半期の決算説明につきまして、要旨を報告させていただきます。

## 決算のポイント



### 第3四半期実績

原燃料価格高騰の影響あるも、工業用フィルム、PCR検査試薬が堅調に推移し、増収増益。営業利益 229 億円（1.3倍）、当期純利益 121 億円



### 2022年3月期通期予想

販売価格の改定の遅れ、新型コロナウイルス変異株の感染拡大の影響が懸念されるも、工業用フィルム、PCR検査試薬などが堅調に推移し、営業利益 290 億円、当期利益 130 億円の予想を据え置く

2

まず、決算のポイントでございます。

第3四半期の実績ですが、今期は原燃料価格の売値への転嫁に非常に苦労しているという状況です。一方、工業用フィルムは非常に堅調な状態で推移しております。PCR検査試薬もおおむね堅調に推移してきており、第3四半期で区切りますと、増収増益という決算になりました。営業利益は229億円、当期純利益は121億円ということでございました。

下方に、通期予想を記述しております。全体としては非常に堅調で、販売の数量は落ちておりませんが、冒頭に申し上げましたとおり、原料価格が非常に高騰しておりまして、売値への転嫁が後追いになっている現状が続いております。今回、売上高は、業況はしっかりと出てまいりますし、今後、値上げをさせていただきますので、プラス50億円だけですけれども、上方に修正させていただきました。ただし、コスト面で言いますと、先ほど申し上げたとおり、原料高が非常に厳しくなっております。転嫁は進んでおりますが、後追いになっておりまして、業況の下ぶれ要因として展開するのではないかと見ております。一方、工業用フィルム、PCRの検査試薬などが非常に堅調に推移しており、予想が非常に難しい状況でございまして、かなり綿密に悩みながら算定をいたしました。結果としまして、プラス要因とマイナス要因双方ございまして、積み上げていきますと、290億円という当初の利益予想、これを何とか達成できるのではないかとというレベルでございまして、結果としては横ばい、当期利益も130億円の横ばいという数値

を通期予想とさせていただきます。

## 決算サマリー | PL



(億円)

	20年度 3Q累計	21年度 3Q累計	増減	
			金額	率
売上高	2,439	<b>2,745</b>	+307	+12.6%
営業利益	183	<b>229</b>	+46	+25.1%
(率)	7.5%	<b>8.3%</b>	-	-
経常利益	125	<b>182</b>	+57	+46.0%
特別損益	▲ 127	<b>▲ 32</b>	-	-
親会社株主に帰属する当期純利益	0	<b>121</b>	+121	-
EBITDA* <small>* 営業利益 + 減価償却費 (のれんを含む)</small>	325	<b>380</b>	+55	+17.0%
EPS (円)	0.3	<b>136.4</b>	-	-
ROE* <small>* 年換算ベース。 (当期純利益×4/3)÷期首・期末平均自己資本</small>	0.0%	<b>8.4%</b>	-	-
減価償却費	142	<b>151</b>	+9	+6.6%
設備投資	168	<b>227</b>	+60	+35.7%

3

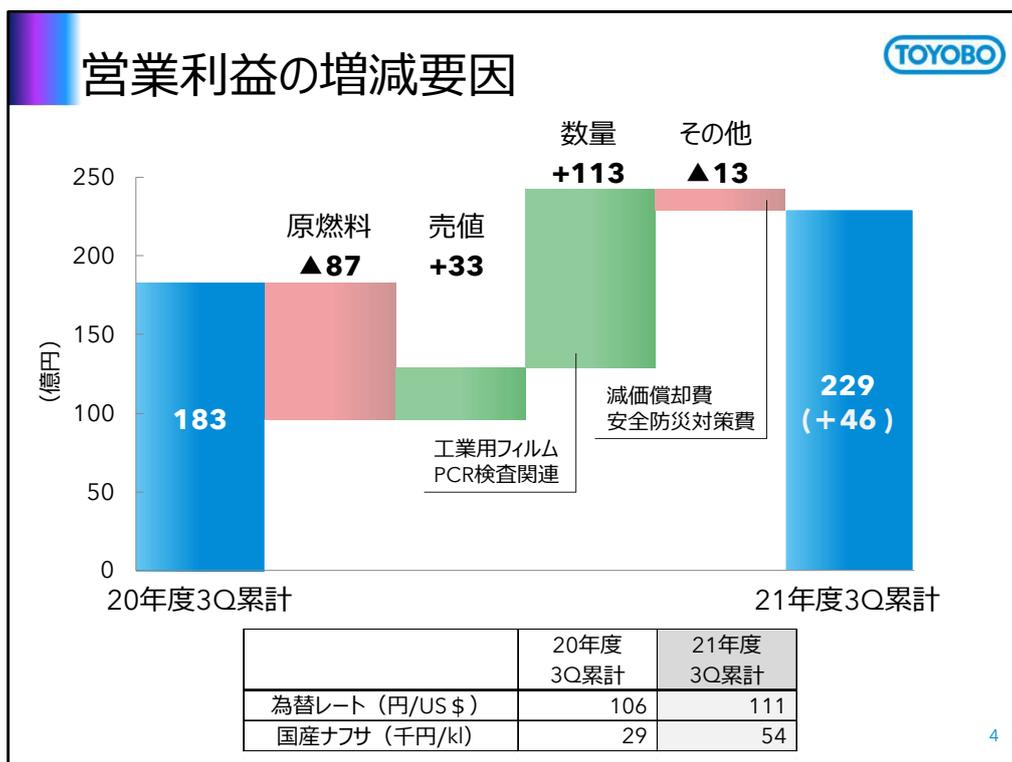
決算サマリー、PLでございます。

以前からご説明しておりますけれども、帝人から買収いたしましたフィルム事業を、これまでは連結子会社として運営してまいりました。12月決算の会社として連結してまいりましたが、今年度、4月1日付で本体に合併をいたしましたので、連結期間の最終のずれ、21年度の1月から3月の3カ月分を子会社の数字として、プラスで加算をしております。売上高では約70億円、利益面では約10億円のテクニカルな加算要因が入っているということでございます。増減欄に示しております、307億という増収のうち、約70億円はテクニカルな要因で、営業利益も約10億円はテクニカルな要因で増えているとお考えいただきまして、それを除きましても、3Qでは増収増益を達成をしているということでございます。ちなみに、四半期連結を始めましたのが2003年度でございますけれども、3Qを区切れば、この営業利益、経常利益は過去最高益ということでございます。

特別損益につきまして、前年度は大きくマイナスが出ております。これは思い返していただきましたら、エクスランのアクリル事業の減損でありますとか、犬山工場で火災が起きまして、その固定資産処分損などが入っております。今期は、そういうものがございませんので、121億円の当期純利益が残っているということでございます。

一番下にございます設備投資は227億円、規模としては、近年には多めの設備投

資を計上しております。これはフィルム設備中心でございますけれども、予定通りの進捗で設備投資をしたということでございます。



3Qで切った場合の営業利益の増減要因を示しております。

原燃料がマイナス87億円と、下振れ要因の一番大きな要因でございます。下の欄に国産ナフサの数字を示してございますけれども、昨年度の3Q累計が2万9,000円/kl、これが今年度の3Qを区切りますと5万4,000円/klと、非常に値上がりをしているということでございます。差をとっていただきますと、kl当たり2万5,000円。当社の場合は1,000円ぶれますと、直接、原燃料に5億円というインパクトが出てまいりますので、9カ月間、12で割っていただきますと、理論上、約94億円ということになります。上の原燃料の87億円とおおむね整合するわけでございますけれども、これだけのマイナス要因がございました。

売値はプラス33億円ということで、比べていただきますと売値の転嫁率は、おおよそ40%弱、38%ということでございます。これは1回の原料値上げではございませんで、今回は年を通じて、断続的に3Q末まで上がってきておりました、現時点でもまだ原燃料が上がってございます。一番下右端の欄、今のところ5万4,000円という累計でございますけれども、これが先週末の直近のスポットでは6万9,000円ということで、7万円近くに来ております。1年を通じて断続的に上がっていきますと、当社の場合は、それを受けての値上げ転嫁になりますので、非常に厳しい局面が続きました。エンプラ樹脂は転嫁できておりますが、包装用フィルムは非常に転嫁に苦労したということでございます。

続いて、その右の数量要因、これで補っていかうということで、好調な工業用フィルム、PCRの検査試薬、キットが順調に出ましたので、ここで113億円のプラス要因でございました。

その右は、その他要因でございますが、減価償却、設備投資が増えてきておりますので、マイナス要因、コスト要因として増えております。また、火災を起こしまして、抜本的に安全防災対策を、通常の設定投資のプラスアルファとして進めております。この部分で昨年よりも、コストが約2~3億円増加しております。このあたりがマイナス要因として効いたということで、出来上がり229億円になりました。

## 決算サマリー | BS



	(B)		(A)	(億円)
	20/3末	21/3末	21/12末	増減(A)-(B)
総資産	4,889	4,912	<b>5,105</b>	+193
現預金	252	347	<b>209</b>	▲ 138
棚卸資産	806	763	<b>950</b>	+187
有形固定資産	2,315	2,246	<b>2,319</b>	+73
純資産	1,826	1,886	<b>2,024</b>	+137
自己資本	1,779	1,857	<b>1,995</b>	+137
うち利益剰余金	619	644	<b>728</b>	+85
非支配株主持分	47	29	<b>29</b>	▲ 0
有利子負債	1,751	1,870	<b>1,889</b>	+19
D/E レシオ	0.98	1.01	<b>0.95</b>	-
Net Debt / EBITDA倍率*	3.8	3.3	<b>3.3</b>	-

\* (有利子負債 - 現預金) <期末> / EBITDA <年換算>

5

では、バランスシート関連でございます。

増減欄を見ていただきますと、棚卸資産が若干増えてございますが、これは昨年度に比べますと、コロナからの回復で在庫を積んでいるという要因もございませぬので、あまり心配はしておりませぬけれども、管理上、売上原価の月数などを中心に、過剰な在庫にならないようにコントロールしながら見ているというのが現状でございます。

自己資本は137億円積み上がりました。これは通常の利益、加えて、株式の評価額が去年3月に比べますと株高で増えた要因がございませぬけれども、利益留保はこれだけ積み上がったということです。下方に記載しております、財務体質、D/Eレシオは0.95と、おおむね目安としております1.0以下には抑えられているということでございます。

一番下は前々回あたりから表示を開始させていただいておりますが、今後、中期計画に入ってまいりますと、先行投資がかなり増えてまいります。そのあたりのことを見ていただくということで、EBITDAとNet Debtの割合を表示させていただいております。現在、中計を策定中でございますけれども、先行投資を入れて、財務体質がどれぐらいになるのかなというところで、何とかこの倍率が4倍前後に収まるように、財務的にはコントロールしてまいりたいと考えておるところでございます。

## 決算サマリー | セグメント別



(億円)

	売上高		営業利益		
	20年度 3Q累計	21年度 3Q累計	20年度 3Q累計	21年度 3Q累計	増減
フィルム・機能マテリアル	1,130	<b>1,273</b>	143	<b>166</b>	+22
モビリティ	255	<b>322</b>	▲ 17	<b>▲ 14</b>	+2
生活・環境	773	<b>824</b>	30	<b>27</b>	▲ 3
ライフサイエンス	192	<b>246</b>	32	<b>64</b>	+32
不動産・その他	88	<b>81</b>	16	<b>16</b>	▲ 0
消去・全社	-	-	▲ 22	<b>▲ 29</b>	▲ 7
合計	2,439	<b>2,745</b>	183	<b>229</b>	+46

6

これが決算サマリーでございます。

後ほど、セグメントごとに見ていただきますが、増減欄を見ていただきましたら、フィルム・機能マテリアル、ライフサイエンスが増益を支えているという形でございます。生活・環境は、まだら模様でございますけれども、残念ながら、原料高などで非常に苦戦をしています。

## フィルム・機能マテリアル



(億円)

	20年度			21年度			3Q累計 増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	738	392	1,130	859	414	1,273	+143	+12.6%
営業利益	87	56	143	122	43	166	+22	+15.6%
(率)	11.8%	14.3%	12.7%	14.2%	10.5%	13.0%	-	-

### 包装用フィルム

- 巣ごもり需要は継続も、原料高により苦戦

### 工業用フィルム

- 液晶偏光子保護フィルムは、新ライン（3号機）の稼働により、約20%増収
- セラコン用離型フィルムは、新ライン（加工設備）の稼働により、約20%増収

### 機能マテリアル

- 工業用接着剤“バイロン”は、エレクトロニクス用途の販売が堅調に推移

7

それでは、セグメントごとでございます。

まず、包装用フィルムでございます。こちらは、前年同期比で減益でございます。21年度に入りまして、冒頭にも申し上げましたけれども、原料がどんどん上がってきておりまして、川上から、第6次値上げまで断続的に値上げをのんでいくという状況が今、続いてきております。これに対応して、売値につきましても、今、第4次値上げまで実施して、3Qまでやってまいりました。それでもまだ追いついていないという状況が続いているということで、現場の担当役員も、これだけ断続的に上がっていくという経験は初めてだと申しております。包装用フィルムにつきましては、次の第5次値上げを、昨日リリースさせていただいたという形でございます。

続いて、工業用フィルムでございます。電子部材ということで、これまでなかなか値上げしづらいという状況であったわけですが、過去のいろいろなやりとりも含めて、ここまで原料が上がっていきますと、いよいよ辛抱しきれないということで、工業用フィルムとしては異例になりますが、昨日、包装用フィルムと同時に、値上げを表明させていただきました。英語版でもリリースをさせていただきまして、工業用フィルムの全素材につきまして値上げの方向で、これは社を挙げてやっていこうという意思表示をさせていただいたということでございます。工業用フィルムのうち、まず、SRFにつきましては、順調に推移をしております。3号機も無事に稼働が始まっておりまして、通期で10%程度は増収とい

うことを目標にしておりましたけれども、これは間違いなく達成し、20%程度まで行くだらうと考えております。21年度末には、シェア50%程度になるのではないかと今見ているところで、順調でございます。続いて、セラコン用離型フィルムにつきましても、コーター、新しい加工設備の立ち上げが始まっております、通期目標、20%程度の増収を掲げておりましたけれども、ほぼ予定通りになるのではないかと、今のところ思っております。ただ、新コーターの生産性に若干手間取っているというところもございまして、少し苦戦している面もございまして、今、2番目のコーターを立ち上げているところでございまして、これが今年5月には設備を稼働させていくことになっておりますので、これを順調に立ち上げて、さらに増益を達成していくという計画を今、抱いておるところでございます。

機能マテリアルにつきましては、いろいろございますけれども、バイロン、工業用接着剤につきましては、エレクトロニクス用途の販売が堅調に推移しております。このあたり、規模はそれほど大きくありませんが、収益を支えていております。

# モビリティ



(億円)

	20年度			21年度			3Q累計 増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	150	105	255	216	106	322	+66	+26.0%
営業利益	▲ 13	▲ 4	▲ 17	▲ 9	▲ 6	▲ 14	+2	-
(率)	-	-	-	-	-	-	-	-

セグメント全体：前年同期に対して販売は回復するも、  
原料高、半導体不足による自動車減産の影響を受ける

## エンジニアリングプラスチック

- 原料高、自動車減産の影響を受けるも、国内・海外ともに、販売回復

## エアバッグ用基布

- 前年同期に対し販売は回復するも、原料高、自動車減産の影響を受け、苦戦

8

その次、モビリティでございます。

全体のコメントを書いておりますけれども、前年同期はコロナの底でございましたので、前年同期に対しては回復してきている状況でございます。ただ、こちらも原料高、半導体不足による自動車減産、加えて、物流の混乱による原料の入手難というところがございまして、その影響を受けており、残念ながら所定の目標には到達できておりません。

まず、エンジニアリングプラスチックでございますが、昨年、非常に売上を落としまして、収益も落としておりましたが、徐々に立ち上がってまいりました。今、原料高、減産影響を受けてはおりますが、値上げにつきましたは今のところ、ほぼ転嫁できているという状況が続いております。こちらは回復基調で推移をしております。

ただ、次のエアバッグ用基布でございますが、こちらは前年度比に対しましては、販売量はきちんと回復してきておりますが、何分、原料高が売値に転嫁できておりません。また、減産の影響も受けているということで、非常に苦戦をしている状況が続いております。

## 生活・環境



(億円)

	20年度			21年度			3Q累計 増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	502	271	773	547	277	824	+51	+6.6%
営業利益	18	12	30	19	8	27	▲3	▲11.5%
(率)	3.5%	4.6%	3.9%	3.4%	2.9%	3.2%	-	-

### 環境ソリューション

- VOC処理装置は、前年度の営業活動の停滞が影響  
LIBS市場回復で、足元の受注急増

### 不織布

- 長繊維不織布スパンボンドは、建材用途が堅調も、原料高の影響あり

### 繊維機能材

- ポリエステル短繊維は、原料高の影響あり
- スーパー繊維は、“イザナス”は釣糸・ロープ用途、“ザイロン”は消防服用途などが堅調

### 衣料繊維

- 中東向け特化生地は円安により好転も、スポーツ用途、ユニフォーム用途は停滞

9

生活・環境でございます。いろいろな素材がございまして、こちらはまだら模様ということでございます。

まず、環境ソリューション、VOC処理装置でございますけれども、前年度の営業活動、こちらがコロナの影響で現地に行って、装置を見て、受注条件を決める、という活動はなかなかできませんでした。足の長い商売でございますので、今年度はその影響で商売が停滞しているということで、売上・収益ともに苦戦をしているということですが、新聞報道でもありましたとおり、いよいよLIBS、リチウムイオンバッテリーの工場が本格的に立ち上がってきつつあるということで、足元の受注はかなりのペースで増えてきております。これは来期には、確実に収益に結びつくものと思っております。来期に期待をしたいと思います。

不織布につきましては、長繊維不織布スパンボンドは、原料高の影響を受けて苦しい状況にありますが、建材用途は比較的堅調に推移している状況でございます。

繊維機能材につきましては、ポリエステル短繊維は原料高の影響で非常に収益を落としている状況が続いております。反面、スーパー繊維は工場の稼働率はかなり回復してきたこともございまして、まず、イザナスにつきましては、釣糸・ロープ用途が堅調に推移をしております。また、ザイロンにつきましても、消防服用途などが堅調に推移をしております。スーパー繊維はおおむね回復基調

が続いている状況でございます。

衣料繊維はなかなか苦しい状況が続いております。中東向けのトープという特化生地は、円安により収益は好転してきておりますが、スポーツ用途、ユニフォーム用途あたりは、残念ながら、まだ苦しい状況が続いております。

## 繊維事業のリソース集約



### 「東洋紡せんい株式会社」発足（22年4月1日）

- ・東洋紡 STC(株)の繊維事業を分割し、東洋紡ユニプロダクツ(株)と統合
- ・統合により、新たに「東洋紡せんい株式会社」を発足
- ・トーヨーニット(株)は「東洋紡せんい株式会社」の子会社に
- ・衣料繊維事業のリソースを統合し、同事業における選択と集中を加速

### 富山事業所の拠点集約

- ・繊維事業の国内生産拠点である富山事業所の、井波工場、入善工場の生産を休止
- ・両工場の生産機能を庄川工場に集約し、生産効率を高める
- ・マレーシアの生産拠点も活用し、庄川工場をマザー工場とし、国内外一体運営を進める
- ・23年以降 井波工場、入善工場の生産設備の一部を庄川工場に移管  
24年3月 井波工場、入善工場の生産を休止

10

こちらはトピックスでございます。

繊維事業のリソース集約ということで、繊維事業につきまして、まず、子会社群を一つの会社に集約していくという動きを発表させていただいております。4月1日から統合して、新しい会社をスタートさせていきたいと思っております。続いて、製造拠点でございます。富山地区に3カ所の工場がありますが、それらを1カ所に集約するというので、当面の繊維事業の最終形になります。重複する事業あるいは業務などを統合いたしまして、収益性は一定の回復を見せてくるだろうと予定をしているところでございます。

# ライフサイエンス



(億円)

	20年度			21年度			3Q累計増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	124	69	192	163	82	246	+53	+27.8%
営業利益	16	16	32	46	18	64	+32	+102.2%
(率)	12.9%	22.7%	16.4%	28.2%	21.6%	26.0%	-	-

## バイオ

- PCR検査用原料・試薬、遺伝子検査装置などの販売が拡大

## メディカル

- 人工腎臓用中空糸膜、ウイルス除去フィルターの販売堅調

## 医薬

- 医薬品製剤製造受託事業は、FDA対応のため、操業度低下



11

ライフサイエンスでございます。

冒頭にも申し上げましたとおり、PCRの検査試薬が、今のところ非常に順調に推移してございます。1Qは皆さんご認識のとおり順調に、2Qもオリンピックの前後で順調に、推移いたしました。3Qは感染の波が収まりましたので、ストーンと落ちるような形の推移で、半減程度になりますが、ここに来まして、オミクロン株の拡大ということで、PCRの検査試薬の引合いが非常に増えてございます。これがどの程度続くか、通期の見方が非常に難しいところでございます。3Qで区切りますと、収益を支えてくれたということでございます。

メディカルにつきましては、人工腎臓用中空糸膜、ウイルス除去フィルターの販売は比較的堅調に推移をしたということでございます。

医薬につきましては、前からご報告申し上げておりますけれども、受託事業は、FDA対応をしており、その立て直しにかなり手間取っているということで、操業度を低下させておまして、こちらも苦しい状況が続いております。

ただ、バイオ全体としましては、ご覧いただきましたとおり、営業利益で32億ということで、非常に大きな増益幅を達成することができました。

## トピックス | カーボンニュートラルに向けて



### ➤ 岩国事業所の自家火力発電所を更新

- ・燃料を石炭から液化天然ガス、および RPF\* に転換
  - ・GHG排出量を、8万トン/年削減
  - ・21年11月に着工、23年10月運転開始
- \* RPF：古紙・廃プラスチック類を主原料とした固形燃料

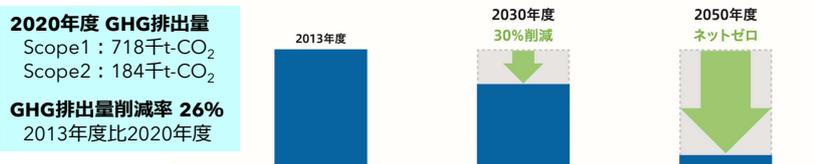
### ➤ インターナルカーボンプライシング制度を導入（2022年4月1日～）

- ・ICP 10,000円/t-CO2 シャドープライス

2030年度目標 Scope1,2：GHG排出量30%以上削減（2013年度比）

2050年度目標 Scope1,2：GHG排出量ネットゼロをめざす  
GHG削減貢献量 > 当社バリューチェーンのGHG排出量

事業活動からの排出の削減（燃料転換の推進／生産効率の向上／再生可能エネルギーの導入など）



※ Scope 1：事業者自らによる直接排出  
Scope 2：他社から供給された電気・熱・蒸気の使用に伴う間接排出

12

続いて、トピックスでございます。こちらにも新聞発表いたしておりますけれども、カーボンニュートラルに向けまして、このような取り組みを始めているということで書かせていただきました。

岩国事業所の自家発石炭火力発電所でございますが、こちらをLNG、液化天然ガスに切り替えていくということで、GHG排出量を8万トン削減することができま。左下のほうに、GHG排出量の目安を書いておりますが、2013年度比で2030年には30%を達成しますと掲げておりますけれども、2020年度で26%までの削減を成し得てございます。今回の8万トン削減の話を加えますと、2030年の30%削減という目標はほぼ手中に収めているものと思います。また、岩国事業所だけではなくて、主要な事業所の犬山、それから敦賀も同じように石炭自家発を切り替えていきます。そのあたりを含めると、2030年までに売上高が増えますので、業況も増えます。その分、CO<sub>2</sub>の排出量も増えますが、それを勘案いたしましても、なんとか2030年までの目標は達成できるだろうと考えております。

インターナルカーボンプライシングも、先日公表させていただきました。まずはシャドープライスということで、設備投資のときの参考値、CO<sub>2</sub>、1トン当たり1万円ということで、これは社内で今後、設備投資をいたしますときに、CO<sub>2</sub>の排出量削減効果というのもの、きちんと意識してまいります。ここから制度をスタートさせたいと思っております。

## 2021年度業績見通し



販売価格の改定の遅れ、新型コロナウイルス変異株の感染拡大の影響が懸念されるも、工業用フィルム、PCR検査試薬などが堅調に推移し、営業利益 290 億円、当期利益 130 億円の予想を据え置く

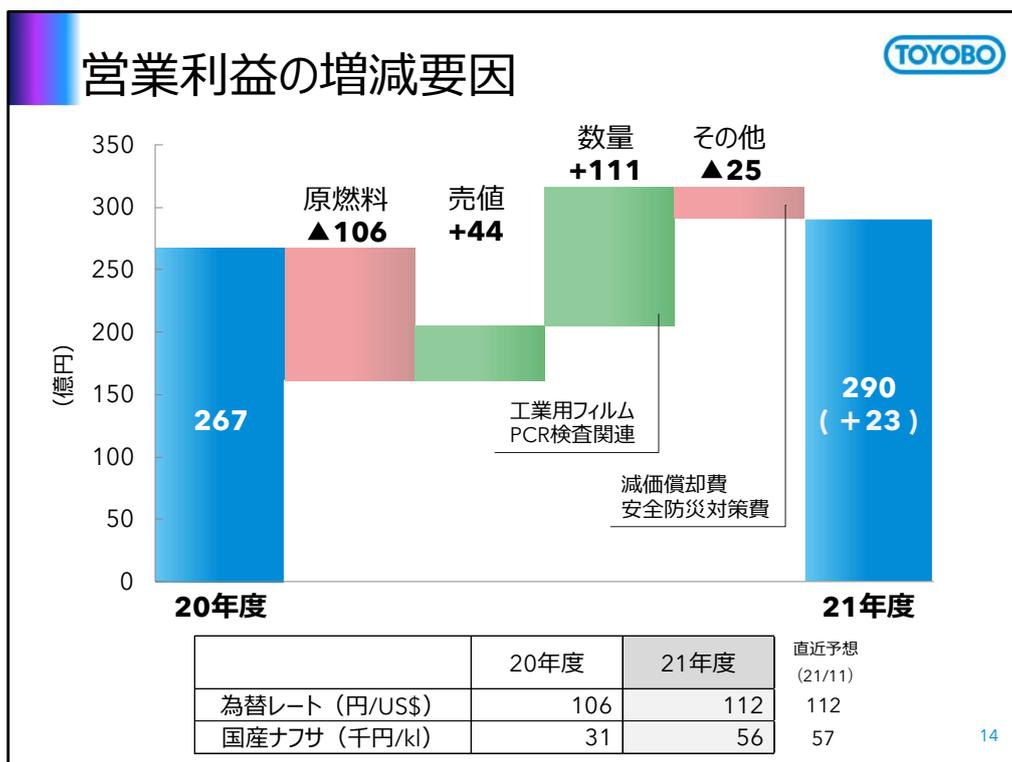
(億円)

	20年度	21年度		増減		直近予想 (21/11)
	実績	3Q累計	見通し	金額	率	
売上高	3,374	2,745	<b>3,700</b>	+326	+9.7%	3,650
営業利益	267	229	<b>290</b>	+23	+8.8%	290
(率)	7.9%	8.3%	<b>7.8%</b>	-	-	7.9%
経常利益	207	182	<b>240</b>	+33	+15.9%	240
特別損益	▲ 151	▲ 32	<b>▲ 70</b>	-	-	▲ 70
親会社株主に帰属する当期純利益	42	121	<b>130</b>	+88	+209.4%	130
EBITDA	458	380	<b>493</b>	+35	+7.8%	493
EPS (円)	47.3	136.4	<b>146.3</b>	-	-	146.3
減価償却費	191	151	<b>203</b>	+12	+6.3%	203
設備投資	233	227	<b>310</b>	+77	+33.3%	310
配当 (円)	40.0		<b>40.0</b>	-	-	40.0

13

通期見通しでございます。

この図に、11月に開示したときの直近予想値を載せております。何度も申し上げましたが、売上高は50億円上振れさせていただきますけれども、残りの収益指標は横ばいとさせていただきたいと思っております。



業績見込みの通年予想でございます。

原燃料価格のマイナス影響は106億円ということで、44億円の売値でカバーをして、転嫁率39%ということで、3Qで区切りますよりも、少し転嫁が進むであろうという予定をしております。包装用フィルム、エアバッグなどは本当に不退転の決意で、今、値上げの号令をかけておりまして、包装用フィルムは長いスパンで見ますと、いずれ転嫁がなされていくと思っておりますけれども、今期切りで収益を見ますと、残念ながら、転嫁率が4割程度にとどまるというような情勢であるということでございます。

## セグメント別見通し



(億円)

	売上高		営業利益			直近予想 (21/11)
	20年度 実績	21年度 見通し	20年度 実績	21年度 見通し	増減	
フィルム・機能マテリアル	1,528	<b>1,700</b>	200	<b>210</b>	+10	210
モビリティ	366	<b>430</b>	▲ 16	<b>▲ 18</b>	▲ 2	▲ 14
生活・環境	1,091	<b>1,120</b>	44	<b>37</b>	▲ 7	37
ライフサイエンス	271	<b>340</b>	45	<b>78</b>	+33	71
不動産・その他	118	<b>110</b>	23	<b>21</b>	▲ 2	22
消去・全社	-	-	▲ 30	<b>▲ 38</b>	▲ 8	▲ 36
合計	3,374	<b>3,700</b>	267	<b>290</b>	+23	290

15

セグメント別の見通しでございます。

11月に出ささせていただいた直近予想の数字と見比べていただきますと、トータルでは変わりませんが、フィルム・機能マテリアルは、まだ今から原料も上がってまいりますので、何とか転嫁に努めてまいりますけれども、利益面という意味では横ばいという数字にさせていただきました。また、エアバッグにつきましては、残念ながら、前回の見通しよりも少し悪化するということでございます。エアバッグの原料値上げに、値上げが追いついていかないということで、この部分は悪化をすると見ております。その分、ライフサイエンスで取り戻したいということでございますけれども、前回と比較しますと、7億円の増益という形にさせていただきました。PCRは、今のところ、オミクロン株が3月ぐらいにはピークアウトして、減っていくだろうという前提でこの数字を計算しております。3Qあたりで思い返していただきますと、少し収まりますと、やはりPCRの需要も落ちていくという傾向が明らかになっておりますので、今は結構な量が出ておりますが、3月中旬ぐらいにはピークアウトして、落ちるだろうという前提でございます。これがもう少し長引き、高止まりするということになりましたら、上に振れる可能性もございますけれども、今のところ、これがギリギリではないのかなと見ておるところでございます。

以上が、私からの説明の趣旨でございます。よろしくお願いいたします。

## ご注意



本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved



All Rights Reserved



## セグメント別情報



(億円)

売上高	20年度					21年度			
	1Q	2Q	3Q	3Q累計	通期	1Q	2Q	3Q	3Q累計
フィルム・機能マテリアル	363	375	392	1,130	1,528	457	402	414	1,273
モビリティ	68	82	105	255	366	111	105	106	322
生活・環境	229	273	271	773	1,091	277	270	277	824
ライフサイエンス	63	60	69	192	271	75	89	82	246
不動産・その他	31	31	27	88	118	26	27	28	81
消去・全社	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	755	821	864	2,439	3,374	946	892	907	2,745

営業利益	20年度					21年度			
	1Q	2Q	3Q	3Q累計	通期	1Q	2Q	3Q	3Q累計
フィルム・機能マテリアル	39	48	56	143	200	68	54	43	166
モビリティ	▲7	▲6	▲4	▲17	▲16	▲5	▲4	▲6	▲14
生活・環境	3	14	12	30	44	15	4	8	27
ライフサイエンス	10	6	16	32	45	19	28	18	64
不動産・その他	5	6	6	16	23	4	7	5	16
消去・全社	▲7	▲7	▲8	▲22	▲30	▲8	▲10	▲11	▲29
合計	44	61	79	183	267	92	79	58	229

19

### ▶ ソーシャルボンド発行

2021年12月に100億円発行  
医用膜製造に係る費用、試薬製造に係る費用に充当

### ▶ 「2021年インターネットIR表彰」で優良賞を初受賞

大和インベスター・リレーションズ株式会社  
上場企業3,944社のIRサイト（株主・投資家向け情報サイト）を対象  
情報開示ならびにコミュニケーション活動で有効に活用している企業を選定



### ▶ 「サステナビリティサイト・アワード2022」でブロンズを初受賞

一般社団法人サステナビリティコミュニケーション協会  
国内の全上場企業および非上場大手企業4,049社のウェブサイト対象  
サステナビリティ情報の充実度を調査し格付け